



大川仁政録

第四帙

参

~ 13
3348
18



門 3343
18

近世 大川仁愛録 第四輯 卷之三

松亭主人編次

第五回

義漢遠来而告變
兩夫膽勇浮海上

大正十年八月廿九日
本大學出版部贈

中々にあつたるふる古郷へ皈らんを秋の夜の月と彼徹書記が
詠りし古歌の心と今身の上と三郎と伊豆の大場小流罪とてより
けりて思ひ見ま我斯遠と寫守とあはれを幸野鹿毛手等が
我と誣るの責を元いと之を我短慮より責起る斯ては室の詮美
あん責と思ひも寄を罪ありて流人とありて古郷へ皈る
限りも若此場ありて朽果る不孝の上の不孝ありて再度養実

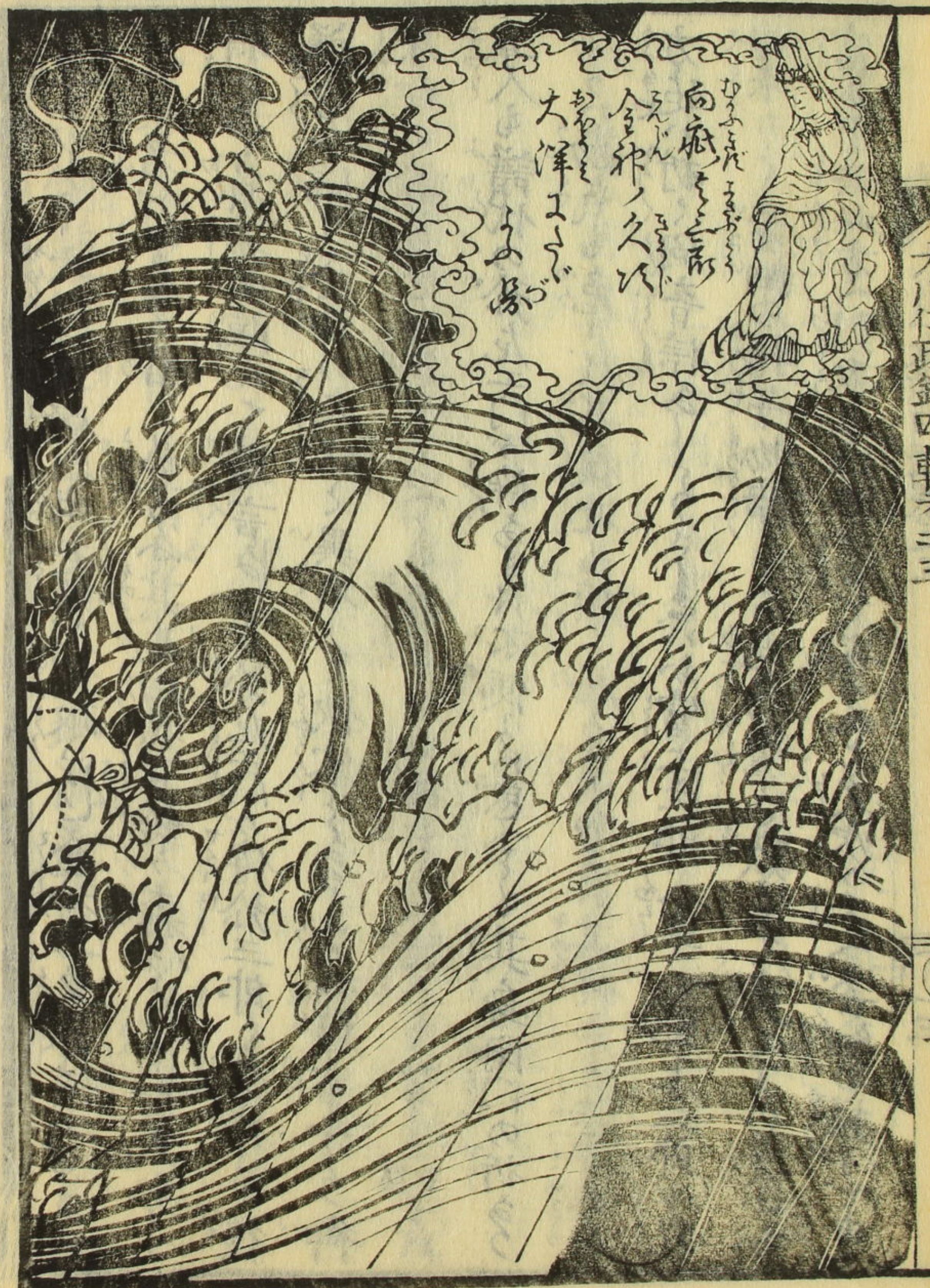
大川仁愛録 第四輯 卷之三

西父母小逢見る夏も叶ひは「幼き時よく覚へ後成人の後乳母の
物語りよく聞て小児の折柄觀世音の冥助と蒙り又生涯肌と放
とる異人の与へ守りの内小觀世音の尊像あり日頃信心し奉
じ先頃木更津へ行い頃よく肌身放た所持ち尊像いつの
向あや失り人小奪りまゝ思ふたうくもは「不思議の事に
思ひ心小掛ア」が此頃見まは又本のよく守の内小ゆり実小神変不可
思美の此尊像一心と籠り祈り奉らるる奇特のありんと夫より
只一心不乱小丹誠と抽で一度歸郷まゝの室の詮美仕出り父兄の
心と安んぢり玉へと海へ入ての垢離ととも他念なく祈念をて夏
一年余り然る小其年録倉御所小若君誕生の御歡とて大

赦行りく小付輕科の流人共召歸さる由風説ありく小三郎は是
と聞心小悦び觀世音の利益空しく我も定めて恩赦のく
其便りを待居り小須て赦免の舟来りまゝ今小我も呼出さん
あんと思ひ居り小宣計らんと三郎一人赦免の内と洩り恩赦不
逢ら者へ悦び勇んで人々小別まを昔舟小乗移ま折しも追風
よく小真帆十分小押上り出り見しが見ら中に遙小隔り見
つ見ぞ成行りり三郎と忙然と惱果居りしが輕科の流人
赦免ありと聞つる我罪へ程重科ゆて赦免の内と洩らるは是も
又幸野鹿毛手小が計らひある彼小我と憎む共赦免の人數の
内あつて小吏の計らひ及ぶまど小斯く有司の吏筆を調

の届ぶらみくど有らん何れ免もゆま今度の赦と外まて又いつの
 時赦免小逢古郷(帰)時の人有大慈大悲の誓ひも空く此鳥守
 と朽果ある運命拙と此身生て心と困らん海底小身を沈め
 體を爰小朽る共魂を悪鬼と成り再び古郷へ立返り兄亘殿小力と
 添室の詮義仕出して恨め奴原一と思ひ知らん如此あるくと
 心と決し逆巻波へ飛入し小寄来る波小打上り體を測へ残るて
 其終波へ引行らんあ口惜し此荒海小身と投せば譬へ水練と得
 り共大海へ押流さまんと思ひし此岸へ打上りまくりイテく
 仕中うそゆまを傍り小有合ふ手頃の石と小腕小抱へ又も海へ
 飛入り同話二小分る茲小先頃と三郎流罪小定まり時お富云

号といひ大川候へ願ひ出お富と引取りし金神の久次といふもの
 あり此者といふ者尋る小其先田積亘鈴ヶ森と宝と失ひし
 時手と負死小臨んで遺言はら弥左門が伴三郎と父死して後
 謙倉小歸り金神の久次と異名く俠客とあり又の遺言より御
 朱印の詮義と心掛るといふも表立と田積家への出入をいふも時
 集人も譜代の弥左門が伴あり不便と思へとも其身岡門の折あり
 しく勘気も免さん其後迎も慎居る夏あり其終も共妻飛鳥
 方迄折る問音信ありさまお富と三郎入牢の節と三郎が乳
 母来りく委細の様子物語り飛鳥驚と歎きて責てりの夏小お
 富あり共此方へ引取と三郎心と安めんと久次が方へ委細の様子と申



遣一頼りかりしる叔とて久次云号あるといひくお富と引取りたるお
 鳥も對面をせざるも折くお富方へ便りして憂と晴したる然るも
 久次を飛鳥が横死と聞大お驚き主水方へ尋行と委敷直とも聞
 俱く仇と報えんと麻布へ行し小鷹を小太郎と奪り難美の如
 行掛り小太郎とるをひ取跡より行見ふ誰も居ざる夫より品
 川へ行見ると主水白糸と俱く死し由あるお驚き此直と三
 郎お告知らし兎も角も計らりと直る録倉お飯り小八郎と
 お富お預け置便舩と求り大鳴へ渡り三郎お面會と流人の
 小屋へ行くる道路と何者あるや水死と見へる渕の辺り死
 居り共いも死して程経し共見へる誤つて水お溺し

やいふせしやと立寄見ると年の頃を九三四おもあつくと覺しき
 男の眉間お疵ある男久次思ふ申う三郎殿の未三稟九殿と
 いふ昔見し終るまゝ面を覺後木更津あり大疵と受し後
 切らると三共向お疵の三とも異名と受らばと聞く此男の様
 体りや三郎殿うういゆとや譬へ其人あるぞ共未體り
 暖りゆまの呼活く様子と向んと水と吐し茶と吞し杯と飲
 抱あるよぞ彼男の息吹返し驚く体り久次と見申物も
 つゞ忙然として居り久次と此有さぬと見し心小を慥ある
 中らふ小點頭ゆ然らば尋問度ゆと此寫小先達て流人とあり
 ころ三郎とるお人と知らざるやといふ此者益驚きと三郎の

我あつらふとて你を何人あるやと久次是と聞て大不悦び扱を
 子三郎殿うそおとせし始りある思ふ果して違ふに某の
 御実家田積家なる孫左エ門が伴孫三郎と候とて我幼き
 時あまに死しぬ知らぬぞおどろけよ覺へおまろてもいふ此
 へ来りしぞとてふ某今あまの金神の久次と申此所へ来りし
 子細の如此くこと始りし落もき一部始終と物語り母の
 変兄御の変と知ると奉り你も本望遂さる度態に此地へ来りし
 なる去りても你を誤り水不濁き玉いりしと向ふよ子三郎を聞
 度々に驚ひく女と兄との横死と歎き我始め伊豆屋と出ても兄
 と俱不宝の詮義し又母の心と安めんと思ひ計りてせし変の却て

不孝と成らぬ悔て返らぬ変なう一度古郷へ立返り初一念と
 果し度日頃信ぞる觀世音と祈り帰郷の程と願ひし流人恩赦
 の沙汰と聞心小歡び待たり甲斐あり今日小至つて我一人取残さ
 し口惜と頼も綱も切果と迎も微運の此身あり海底不身
 と沈め藻屑とありんと如此くあせし小此所へ打上らば故今度
 石を抱きし沈しし其後の変の覺ど你の心抱きし心付見ま
 又爰小めるといふ久次を聞て感涙と流しその実小疑ひもなく
 你の丹情納受有と觀世音の救き玉あま相違なき若其終り
 骸とも苗ぞ空しくあせ玉いあま你のう某も遠く来ぬ甲
 斐もなく人小同ふ共知る者ありば尋ね惑ひし其上小此身の誠も

埋木の身のある果も覚束まると小大慈大悲の恵の程又有ぐと
 遠赤し斯る奇瑞と蒙る上何ぞ期をば此嶋と抜出て母御
 の仇と報ひ紛失の御朱印詮義仕出し兄御の過と補ひて又公の
 心と休め玉へ旋と破り罪科に此身小引請刑罰受你小難義を
 う逃じとのへむと三郎是と聞実你のふ如く法と犯とへ恐まゆまで
 親と討と兄と失ひあめく爰小朽果るべ義もぬく勇もあめく日本
 魂もと物り俱不戴天の仇と討宝の詮義仕出しるべ其時了と
 名象出自り罪小伏とべ何条你小罪と負せん去あめく此所と出ん
 小舟あててい出がさかえいふとべといひるまば夫と某用意致
 せり是いあま軍陣小用ゆる浮皆なり是と身小帶と水中へ入る

くく水練得ざる者も沈むまあへりある大河も容易渡り舟の
 準備の速も成がじ運と天小任し此浮皆と腰小帯海上と押渡
 りんと三郎勇と立面白く死んと覚期極り此身此終小
 てと渡らぬ渡らん去る準備の有上何ぞ恐まん女も早く
 用意えんと二人り得と支度る一浮皆と腰小帯手頃の板と押
 流し目も及ぶる海上へ恐ま気もぬく飛入る板小取付互ひ声
 と掛合と遠の沖へ漂と出り斯る折柄海の鳴出ると尋く一天
 俄小き曇りともあめく墨と打明し如く降雨へ彼と束れて落し
 うと怪まど尺尺も分る其中へ電の光り眼と射鳴響く雷の
 音い百千の石火矢と一度小放るふと思とるると三郎と久欠と

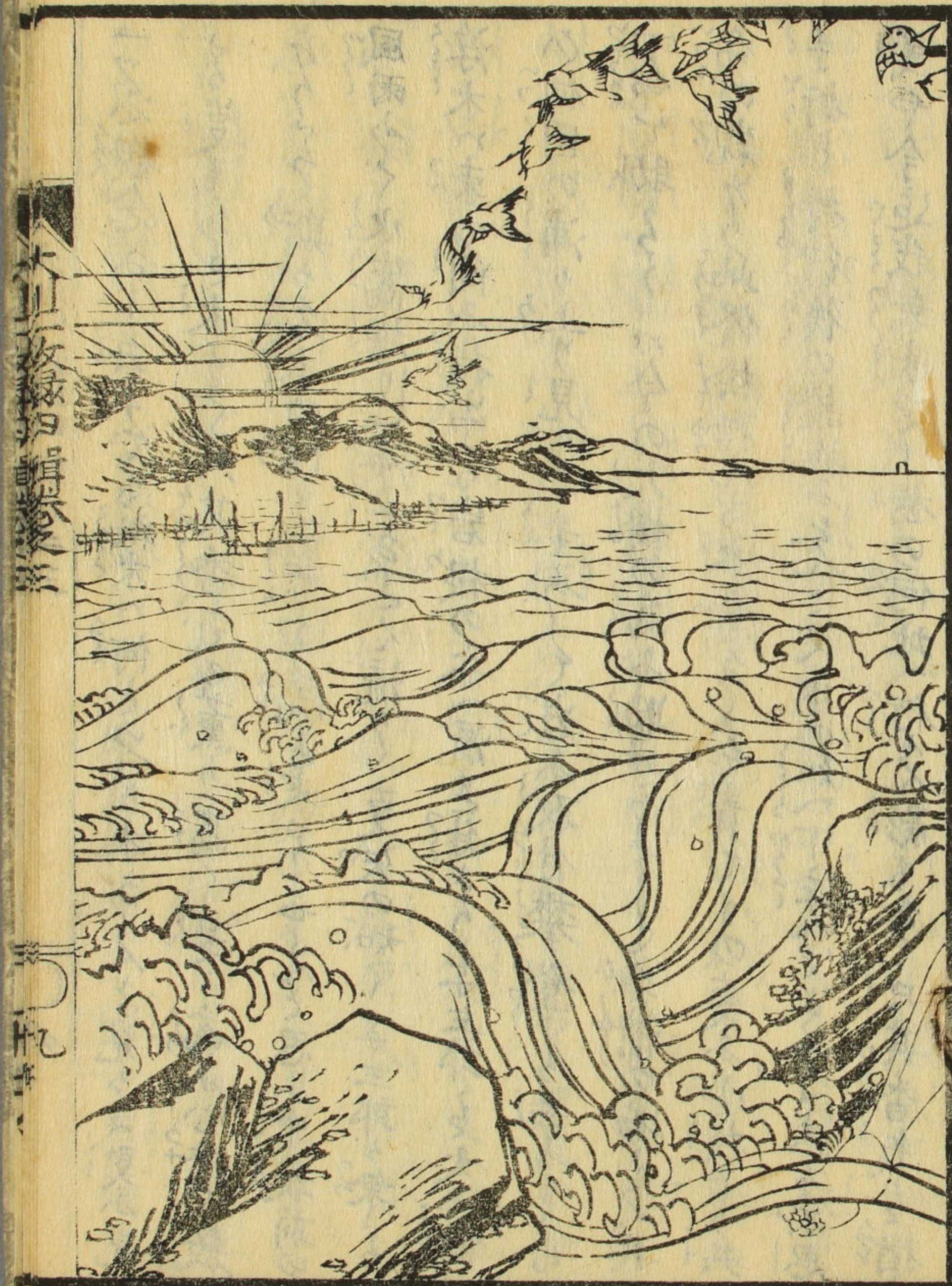
見ど久次と与三郎の姿と見ど互ひ小声と懸合とも震動雷
電の音小紛きてサしも聞えん小山の如き大波小上り下り世
程小膽勇劣る流石の兩人目眩と前後も知れど波の行伝か
流るる

再活菩薩之加護

第六回 義與愛養実異諫

再説与三郎久次の兩人胆太くも大海へ出づし小俄も暴風雷雨
發て是が爲小犯さるる身体自由あり今早氣力劣る何竟も
覺へど生死とも別ざらる然る小与三郎を多るぬ香氣の鼻小
入ると覺て不斗心付目と用と傍りを見ると風おちく雷雨も

静り日輪海上と照し玉あまた大樹の嵐の爲小吹倒し押流るるや
見ると流る木の枝葉茂り上小掛り我身の卧居るるづこの所
あゝ縁とも遙向ひ小寫り山見へると三郎思ふ中久次と俱小
海小渡り暴風孔雷の爲小既小命も終るる小我の斯る流れ
木の上小掛り不測小命と助るに實小人力の及らざる所
龜の浮木小逢も小拘り久次をへり中ん定り命終りし
あゝ我爲小いと尽く遙くの海陸を越て尋来り本意を
遂げて爰小命と落るる嗚残念小思ふ不便の次第し
せり七骸ある共尋ねる思へども詮方なき我中
本望達るる生存命と命小ゆき頃て跡も追付へり心



大正金四郎



与三郎
伊東ヶ海
再々の図

大正金四郎

一ツ小觀念あり去りても此木の何とつら木ありんと思ふ更小見
らち支りあり木あり只其香気の薫り高く是れ為小心清く敷
ちうらら斯る名木の何とつら流ま来りやんと思ふ中最初の
風雨あり水嵩増り海上ありと流り支矢の如く子三郎乗る
浮木の束の間小指し岩根の本へ流ま付たり子三郎大歡
ひ何国の浦より見んと辛ありて岩小取付攀登り去りて
一命と助りて今の大樹の為小助けらるゝ非情の物と之共
命の親方此終捨行人も本意ありて責て日の支小小枝あり共
手折り持行後の證極小と又本の処へ下るとりて去り不思
羨や今追我乗来り樹の何地へ行ん影もあらず只其香気と猶

肌小移りて残るを爰小うと思ひ見まば大嶋あり水死と助り
今又斯る奇瑞と見る支全く大慈大悲の妙智力ありて我と救を
玉ひしと始りて悟りて信心膽小く遠小礼拝し奉り斯の
如く冥助と蒙る上の本意と連せん支疑ありと心小勇と生し
夫より人家めり方へ尋ね出何とつら知らるやと向ふは伊豆の伊
東が崎ありとつら此上へ先実父田積家へ行くと久く又小對面
あり委しき様子とも尋問母の枕と胡くと昼夜を分ぶ道と
急ぎて総た一行りて我も斯の如く身の上をむ日の中小行
んを遠慮しと夜小入ると父が第宅へ至る伊豆屋与三郎密小泰
りつら由と言入るとつら集人彼を伊豆屋喜兵衛方へ遣し其後絶

て音信もせざりし小木更津ありく不毛とほし疵と受其後流罪小
成しと聞つと共我子ありく我子小ゆりごまの過ちありてか捨置
し小いありく尋来に中ん吾逢つと謂ままりとつとも怒と
音信せざりしと今来より母の死と聞知りてある人逢で飯も不
便方逢て中より心聞ぐやと思ひ多き庭より呼入て對面は
小三郎を先泪の先立ちつるまを哀も云ずして平伏て居り
隼人のやがれぬと伊豆屋の家へ遣してより我子ありく我子小ゆり
まは今迄絶て音信せざりしが何木の子細有て来りしを又先頃つ
めりし流罪小處せらるるに聞つるがいかりて戻つてやとつるよ三
郎先母の横死と歎と寫小在て何変も知らざりしと悔と始とつる

如此くの子細終つて申とば斯くと伊豆屋の家と出り更木更
津ありこれ一条其後流罪と成し一件残るる具小物語り然
る小此度の赦小某一人取残るる命と捨んと思ひ小觀世音の
利益ありと助ありと折柄弥左衛門が伴弥三郎今久次とつる
者尋来り委細の様子と聞しより一度故郷へ立飯り母の仇と討
紛失の御朱印詮美仕出せし上あり名乗出刑と受んと扱しを
兩人海小浮び小宣計らん風雨の為小侵とま久次が行衛と知
らと某一人如此くこの変ありと命助ありとらと一部始終と物語
ま隼人の聞と確と怒と汝左程の不所存者との思とほし只
今迄の責は我預らるるにありま責るも詮ありまど母の仇と討

んと欲しと理り各々も云うごとく御朱印の紛失を汝が預
がる所なり又譬へ母の仇と討得たり共法と犯して何ぞ孝道
ふなりと汝が母逆も何ぞ不孝の子の手向と受ん又久次が生
死と知らざるといふも彼も又いふやと助り居る間敷ふゆらど
然る時よん汝が罪と身ふ引受刑罪と受んといひあはるる若
彼名乗出て刑罰ふ行まるが己が罪と人ふ負せく母の仇と
討たり逆何ぞ譽といふをきや却て人の物笑ひとなり不孝ふ
不孝と重る道理し夫のともいふと母の仇と付観ふ中若上より
召捕まるべいふよと云ふ様も大虚気母の仇と尋んしん
一刻も早く名乗出潔く刑罪と受よ人ふつゝ負せ科も

者と殺さんい不義といへん不仁といへん斯る虚気の其方と子
といへんも腹辛若此終ふ名乗出ど未永く親ふあは子に
ゆへに再び汝が面と見も穢と云捨て一間の内へ入ふより三郎を黙
念と烈しと父が詞と聞案小相違し事も立まは居りしが実父の
詞の如く我罪と人ふ負する不仁あり不義なりそのつ追もか
と責め非業の死と遂王の母の仇と討室の詮美仕出と
せふめふ父の心とを休めりものと提と破り法と犯して来はるど
今の仰と聞時ハ譬へ母の敵と討たり共父の心小違ひて詮美
更し此上ハ是非及ぶ此終直小名乗出明白小言上は刑罰
と受て心の内小思案と決し寔くして立出たり夫より

直ぐ鎌倉へ去越へ道もくも思案あまや伊豆屋の養父母
 も我心より種々の苦勞と懸へども憎し共思ひ玉へ先年
 流罪小行まじ時もめぐ心と尽き今も折く同音信く合カ
 玉る其慈愛と余知るな一寫と放出我とまづの罪と認へ又
 此所小刑罪小逢り咄や本意多く思へん不孝の上の不孝
 て言説詞もあまも是も又悔てくぬ我過ちいふも可為
 様をせめくりの罪に今迄の不孝の程直と逢り託度々まじ
 若其夏叶くば余知るな一暇をせんと思ふ又夜小入りて
 伊豆屋の門小表り内の中をくく窺ふ以前小替らぬ店の繁昌出
 入人の多きまじ次手悪く爰と立退き裏手へ廻り塀ぐ内

様子と考り小夏の夜まじ雨戸も鎖ど庭も誰中へ入ゆて
 物る声音の聞へるまじ若又母かかりくくと耳欵て立聞小裏の切
 戸と押明く誰中へ出来る者ゆき誰あうんとかの闇も小蔭の方
 小身と潜めて窺ふ中へ内へ出まると見まじ幼く時我小乳と
 香る幼馴染の乳母とまじ人の出来じと思ひまじ小蔭
 と出くまじと呼かると乳母のあてと振返り呼玉へ妻を夏
 み候とつみいふも然ある一寸待然と立寄とまじ誰人
 ろゆあまもや妻小用と何用あるとつめを中へ一朝一
 夕に言尽し我声音と聞忘まじよ三郎かりと面と包く手
 拭く乳母の悔り仰天一と和子くかをせし藁の上より手



かより守育る和子の声忘る中うんたうん共余りと思ひけり
 故ちや心の付らう今も今も罪御の仰今度御上御悦ゆ
 て流人の者と御赦免め召飯さりと申し追付三郎も帰り
 来んと心付待ら甲斐も彼の一人赦小外も取残さしと人の
 噂若ま夏のものん生得短慮の気質もさうある夏もさ
 らんと思ひいと案ドラうと宣ひ小母御も乳母も俱く昔の
 夏と語り出泪とあり居りぞと語り候申と三郎兩親
 とし其方迫夫程小我事と案ト玉る忝と其歎ふ懸るのも皆
 此身の過ちるある夏今更悔しく思ふこと歎くと見てい
 おとの一不弥増乳母の思ひ過ち夏いふても返らばま種く

とつ夏夏夏同度夏も山くゆと爰と往来人目小立つ裏の冊い
 夜小入りくら誰も来る者ゆらば彼所で暫く物語らん
 来ませと手を取て冊ひの内へ密小伴ひ先何うらつと
 倉へいりあて来玉ひ一赦免の敷あり洩し小ゆらばと
 人数の中ありくと同き今更い無いごとく止る夏も
 ごと我のそ一入赦小洩れ死と極めら始り金神久次の尋ね
 来り如と兄との横死と聞て鳴と抜出海上う風雨の難ふ久次
 行方志を一人命と助らうと縁州なる父の本へ尋行し丸存
 外の災の怨を一聞は実尤名乗て出たもたば未承親
 は子小ゆらばと嚴しと仰夫故名乗出んと思ひ此家の父母も

今一度逢く不孝の罪と説眼をよほしとまきまき来る事い来る
 這入更へ、なうんといふをよしと祈り、其方の出ら故
 飛立中りに思ひきて我を忘まき呼もり一部始終と物證
 聞度くは膽潰き下総なる爺御前の宣ふ所を尤なうり余り
 氣強く祈く女君此世不在と云ふ様違を仰めは聲翌日召
 たりと追も道々文いのうまき給まきづり此乳母が生涯の願ひ
 ぞ也下総なり又御つる乳母が能様小言説せん聞まき玉とうき
 口説がよ三郎も詮方ありありと更とつみ出我又心小悲気
 の付より此上又母又逢建も未練の更も聞まき猶此身の心の
 迷ひ実父の詞と反古もせん此場の何共つひきて又母又逢て

行いし心の中小覚期極り名兼て出んと思ひがそのこの詞捨
 難く父の仰ふ違ふ共一先此地を立退て何国の浦も身と忍び
 のかき丈を道まき見人此家の内の二親も一目逢て思共る
 中か貞と見るあふ未練も起り此地よりあふ捕へらるる詮
 めと更あり跡まき今宵のゆりさぬと又母傳へたもさるばや
 計云捨く出んとまき取廻り然宣ふ偽りく乳母をまき
 爰と出名兼て出る覚期ありめとワツと計み泣け外の方も
 老女の声してよくと一声泣と押へまき音高し声もなまき小柴
 垣の隣り喜兵衛夫婦の立出と始終の様子に彼所で聞り田積
 の夫人の仰ふを実小武士の義気あり市人の心で我子小死ねと

云難うと殊小其方の義理ゆ子つごも我家と立退し折れ捨て
置つご心あり後ど跡小残ぎ一通小委細の様子知ま故其供小
捨置り実父の詞を重共我々夫婦が歎きと思ひ須く思ひ止る
る只今名乗出らん二度三度観世音の冥助を蒙り海上
の難と免がま一夏も水の泡と成菩薩の御心も違ふべし尤思
ひごとと夏と別理と尽し父が詞と三郎も実も思ひ須か
より高き養育の大恩と余所あり不孝不孝と重し此身
成増し共思し召ば冥加至極の父の慈愛今の仰と一し小理あり
佛意の程と推量ま実去る夏ぞく免も角もく世と悉く
望の程も果し申えん然し後小へるも先夫追ひ仰小後い

一先此鎌倉と立退べし与五郎小逢ぎく残り多らん存ぞまども
長居致さ人も知りくあふ夏あく父母小難美と掛人も計らま
はば直さぬお腹中べしと立上ると母と乳母らん今暫しこ引留るを
喜兵衛を隔て何時追つ共名残を尽し命ぞ小ゆるあく何国の
浦小在く又再會の期もゆらん夏の夜あまみさしも早く夜明
ぬ中あつよへる恵も高き山吹の花物いそ後ど押戴く恩美の重
き囊肚小包と兼る胸の中思ひる同ト父母と乳母が誠も身一
小余の情とつと捨る袖と松とく出く行

大川仁斐録四輯卷之三終

